小学１年生における鍵盤ハーモニカの指導法に関する調査研究

Instructions for method of teaching children in the first grade of elementary school how to play keyboard harmonica

仲田 久美子 / 沖田由香※

NAKADA Kumiko / OKITA Yuka※

［キーワード Keyword］　学校教育，小学校，指導方法，鍵盤ハーモニカ，技能，評価

［所　　属 Institution］　岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

岐阜大学教育学部附属小中学校※　（Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］

本研究は、小学１年生の児童が鍵盤ハーモニカの演奏方法を学習する際の指導方法について述べたものである。本研究では、鍵盤ハーモニカの指導に対して児童がどのように感じているか等、実態を把握するためにアンケートを実施し、その回答の結果の分析を行っている。そして、分析により、児童がどのような問題を抱えているのかについて明らかにしたうえで、より有意義な授業を展開することを目的としている。はじめに児童の様子を観察するところから開始し、次に問題を抱えている児童が諸問題を解決するためにどのようなアプローチができるか考察した。そして、鍵盤ハーモニカに関するアンケートを実施し、それを分析した。さらに、鍵盤ハーモニカの指導において有効だと思われる「算数ブロックのせ」を考案するに至った過程を述べている。また、さいごに、鍵盤ハーモニカを用いた創作活動の実践について報告している。

はじめに

本論は、研究の目的について述べた後、各クラスの人数や児童の音楽への興味・関心について述べている。続けて、アンケート実施方法とアンケートの回答結果について述べた後、家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っていない者について検証している。アンケート結果を踏まえ、児童の問題解決のために取り組んだ「算数ブロックのせ」や「ペア学習活動」、また、「身体的な要素からのアプローチについて」や「創作活動」について紹介する。末頁には、実際に使用したアンケート用紙を掲載している。

研究の目的

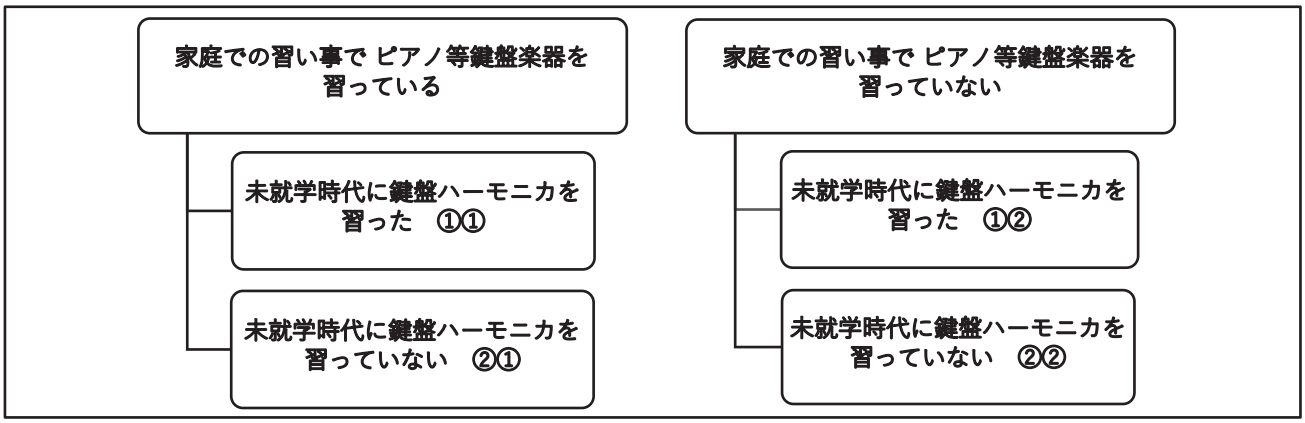
本研究では、特に鍵盤楽器の未経験者に焦点を当てている。その理由は、児童の実態を把握するためであるが、まずは家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っていない未経験者が小学校で鍵盤ハーモニカの授業を受ける際、何をどのように感じているのかについて知っておきたいと考えたからである。その目的で、岐阜大学附属小中学校１年生に対して鍵盤ハーモニカに関するアンケートを実施し、「家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っていない」と回答した者を抽出した。家庭での習い事としてピアノ等鍵盤楽器を習っていない者にとっては吹きながら弾く、というのは簡単な動作ではないと想像する。通常、音楽科では、算数科の宿題の計算ドリルや国語科の漢字ドリルのような副教材がないであろうし、鍵盤ハーモニカを毎日持ち帰って練習できるわけではない状況下が多い中で、家庭内学習に取り組んでいる者とそうでない者とでは、実技面で差が生じる。クラスという集団に対して実施する授業では、実技面が不得手

な児童に対して手取り足取り指導することは難しい。それが積み重なったとき、児童は音楽の授業を楽しくないと思うのではないかと想像する。普段からクラス全員が評価の「B」以上がつくための授業を実施することを前提としていることもあり、本研究では、特に鍵盤楽器の未経験者に焦点を当てることにした。今回、検証のために、岐阜大学附属小中学校の小学１年生の児童 92 名（95 名在籍、アンケート実施日に３名欠席）に協力してもらい、鍵盤ハーモニカに関するアンケートを実施し、その回答について分析した。また、本研究では、共同研究者である附属小中学校音楽教員の沖田が授業及びアンケートを実施し、筆者が授業の記録を取った。使用している教科書は、教育芸術社の「小学生のおんがく 1」である。題材は、「鍵盤ハーモニカの演奏」で、「どれみと なかよく なろう」及び「せんりつで よびかけあおう」を主に、その他、「はくを かんじとろう」及び「はくにのって リズムを うとう」、そして「みの まわりの おとに みみを すまそう」の要素も含んで構成された。使用した教材名は、『たのしく ふこう』鹿谷美緒子 作詞／作曲（p.34）、『どんぐりさんの おうち』（久野静夫 作詞／市川都志春 作曲）（p.36）、『どれみで あいさつ』（安西薫 作詞／長谷部 匡俊 作曲）（p.38）、『なかよし』（海野洋司 作詞／佐井孝彰 作曲）（p.40）である。児童については、わずかに興味・関心の薄そうな児童もいるが、概ね音楽への興味・関心が高く積極的な児童が多く見られた。そして、飛沫感染予防の観点から、一度に演奏する児童の数を制限したり、マスク着用のまま歌う「うたの係」と「鍵盤ハーモニカ演奏の係」を分割したりして授業を実施した。

アンケート実施と結果分析方法について

今回のアンケートは、児童たちが、ドレミの位置、ドレミの正しい指の置き方が理解できた後に実施した。いずれのクラスも、沖田が口頭で読み上げながら実施し、１問にかかる回答時間は約 30 秒であった。今回、把握しておきたかった事項は、「家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っているか否か」である。そこで、「あなたはこれまでに鍵盤ハーモニカを習ったことがありますか」と、「あなたは習い事でピアノなどをならっていますか」という質問を設定した。また、児童がアンケートに答えやすいように設問は黒字で、児童が回答する箇所を朱書きにし、カラーコピーで配布して実施した。そして、アンケート用紙の冒頭タイトル部分の「1 年生」の算用数字部分の色を２色にして男女別属性を予め分けて配布した。上記の２つの質問のうち、２つ目の質問で①と回答した者は、「家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っている者」である。そして２つ目の質問で②と回答した者は、「家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っていない者」である。これを更に分類していくと、次のようになる。【図１】

【図１】分類表



また、今回のアンケート回収後、この設問の回答がなく、いずれの区分にもあてはまらなかった「未回答者」が３名いることが判明した。この３名の回答を集計に含めることで正確なデータが得られないと判断し、全ての項目で集計に

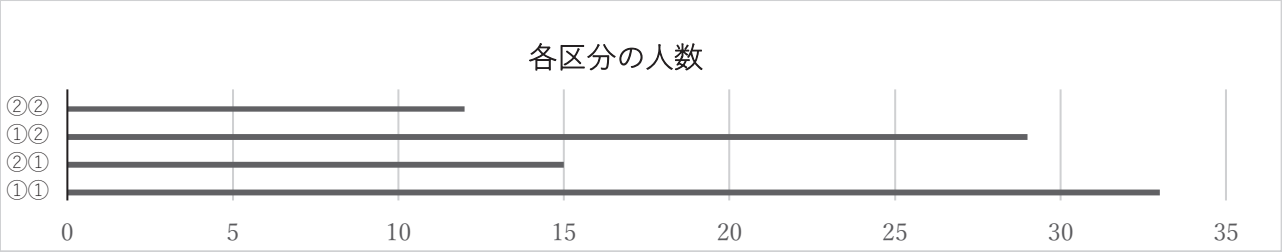
含めないことにした。したがって、有効な回答は 89 名分となった。

アンケートの結果

今回実施したアンケート用紙は本論の最終ページに掲載している。アンケートの質問事項にはそれぞれ質問の意図がある。また、小学校１年生への筆記アンケートを実施するにあたり、視覚的な威圧感がないよう注意を払って作成した。アンケートの実施については、授業内で児童が回答に困らないよう、沖田が速さに気を付けて実施し、回答時には仲田の他に岐阜大学の大学院生でピアノを主専攻とする学生も一緒に巡回に加わった。

次に、各設問の設定意図について述べる。ちょうちょのマークの「難しい部分を探して丸をつける」という内容の設問については、「ドレミの音名」と「休符の●という記号」に丸をつけるだけにし、児童が感覚的に丸をつけられるように設定した。また、花のマークの「動かしにくいと感じる指」という内容の設問については、普段自分が感じている指の動かしにくさが視覚的にすぐ読み取れるように記載した。そしてひよこのマークでは、「音と音の連結、離れた音へ移動する、少し複雑な動き等、二音間の移動の難しさ」を回答してもらうよう設定した。また、かたつむりのマークの「鍵盤ハーモニカの演奏全般で難しいと感じる点」についての設問では「息を吹きこむ」という項目を盛り込んた。次のりんごのマークの設問では、授業に対する率直な感想について質問した。また、ベルのマークの「今後自分はどのようなことに挑戦したいのか」についてイメージする設問では「創作」も盛り込んで質問した。最後の設問である顔のマークの質問では、「幼稚園や保育園で鍵盤ハーモニカに取り組んでいたか否か」という質問と、「家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っているか否か」という２つの質問を設定した。これは、児童の実態を把握するうえで欠かせない要素になると考えたからである。次に、各区分の人数については、②②は 12 名、①②は 29 名、②①は 15 名、①①は 33 名であった。【表１】

【表１】各区分の人数



属性ごとに授業に関する興味・関心の度合いをはかる設問「りんごのマーク」と「ベルのマーク」の部分だけを集計した結果を下記にまとめた。【表 2】【表 3】

【表２】「鍵盤ハーモニカを演奏することについて、どのように感じているか」（りんごのマークの質問事項・単位は人）

区分	とてもたのしい、だいすき。	まあまあすき。	なんともおもわない、ふつう。	つまらない。
学年全体（89 名）	65	15	6	3
男子（44 名）	30	8	3	3
女子（45 名）	35	7	3	0
①①（33 名）	28	3	2	0
②①（15 名）	13	2	0	0
①②（29 名）	15	9	2	3
②②（12 名）	9	1	2	0

【表３】「今後、鍵盤ハーモニカの授業でどのようなことに挑戦したいか」（ベルのマークの質問事項・単位は票）

※①②男子に未回答者が１名いる。※倍率については、小数点第３位以下を切り捨てて繰り上げている。

区分	もっとむずかしいきょくにも ちょうせんしてみたいな。	ほかのいろいろながっきといっしょに、にぎやかにえんそうしてみたいな。	けんばんハーモニカで、じぶんだけのきょくを つくってみたいな。	ほかの子のえんそうを きいてみたいな。	投票数の合計	倍率
学年全体	55	36	35	17	143	1.61
男子	30	13	16	7	66	1.50
女子	25	23	19	10	77	1.71
①①	26	16	14	8	64	1.94
②①	10	3	7	2	22	1.47
①②	14	12	11	2	39	1.34
②②	5	5	3	5	18	1.50

このアンケート調査の前に「得意な児童にとっては授業内容が簡単に思え過ぎてつまらなくなったり、不得手な児童にとっては授業内容が難しくつまらなく感じたりしてしまうことがあるのではないか」と予想をしていた。得意な児童にとって、授業で取り組む楽曲は、恐らく彼らが家庭での習い事として取り組んでいる楽曲と教科書の内容とを比較すると、当然、教科書のほうがやさしいだろうと思われる。そのような時に子どもは、自分が苦労せずにできてしまうことに対して面白みを感じにくいことがあることが以前より散見されていた。今回、このアンケート結果により、得意な児童にとっては授業が必ずしも楽しいものではないということの裏付けができたと言える。逆に、鍵盤楽器が未経験に近い初心者の児童でも、興味・関心の度合いが低いということではないことが分かった。また、複数回答のベルの質問について、【表３】からも分かるように、概して、他の子の演奏にはあまり興味がないようである。回答の中には、①②の区分の男子で１つの項目にも丸をつけなかった児童がいた。①②という区分は「未就学時代に鍵盤ハーモニカを習ったが、家庭での習い事ではピアノ等の鍵盤楽器を習っていない」という者になるため、このような児童に対しても音楽科の授業に楽しんで取り組めるような工夫を実施していきたい。

この投票の結果については、家庭での習い事としてピアノ等の鍵盤楽器を習っている児童、全 48 名に対して 86 票で 1.79 倍、家庭での習い事で習っていない児童、全 41 名では、59 票で 1.44 という結果となった。つまり、今回のアンケート結果では、家庭での習い事としてピアノ等の鍵盤楽器を習っている児童のほうが、そうでない児童よりも挑戦したい気持ちや興味・関心が高いと解釈することができる。今回は１名の児童が３票投じたり、１票も投じない児童がいたり、個々によって様々な反応が見られた。今後の授業の展望としては、今回彼らが「挑戦してみたい」と感じた項目について、挑戦する機会を与えてあげられるとよいが、そのためには単元の見通しを立てたり、身につけさせたい学力・知識・技能等を明確にしたりして、年間を通じた、可能なら６年間を見据えた計画的な学習デザインを立てられるとよいと感じた。

次に、今回、本研究を実施するうえで、筆者が注目していた「家庭での習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っていない①②及び②②の音楽への興味・関心」や、「鍵盤ハーモニカを演奏することに対してどのように感じているのか」についての回答集計結果を下記に示す。この設問を設定した理由は、実技教科である音楽科の授業では、経験の差が授業の好き嫌いや得意不得手に直結してしまうと考えたからである。また、家庭で鍵盤楽器に触れる機会のない児童が何につまずき、何に問題を抱えているのかが見つかるのではないか、と予想したからである。この区分（①②及び②②、合計 40 名）については、次にアンケートの全項目について回答結果の分析と検証を行う。文中では、音名をカタカナ表記にし、児童が書いたものや実際の授業の板書で書かれていたものがひらがな表記の場合は、実際の表記のままとした。

１問目：「むずかしいと思う箇所を問う」ちょうちょのマークの設問の集計結果　※実際のアンケート用紙内でも休符は●で表記したため、ここでも同表記とする。

「れどれみどみど●」は４名、「れどれみ」が 23 名、「どみど●」が７名、「みれど●」が２名、「みれどのれだけ」が１名、「最後のど」が１名、「全て」が１名、「なし」が２名であった。練習の回数を重ねるうちに上達していったのだが、特に初日、「れどれみどみど●」の部分では多くの児童が苦労している様子が見られた。そのような様子を見ていただけに、アンケートの回答時に彼らがどこにむずかしさを感じているのか的確に表せたことに驚かされた。できない箇所が分かっているということは、多少なりともできる箇所があると感じているとも言えるので、問題箇所を把握できているという意味だと捉えた。児童が自分なりの弾き方や吹き方等のコツをつかむまで、何度も練習を重ねさせるとよいと思われる。

２問目：「動かしにくいと思う指を問う」花のマークの設問の集計結果

このアンケートでは楽曲演奏で使われる親指、人さし指、中指の３本の指について調査した。「親指」と回答したのが７名、「人さし指」と回答したのが７名、「中指」と回答したのが 22 名、動かしにくくないと感じたのか無回答だったのは３名、そして全ての文字を囲むように大きく丸をつけた児童が１名いた。この結果から、中指に不都合を感じている児童が多いということが分かった。楽曲の後半部分「れどれみどみど●」では中指を２回使う（「み」の音を弾く際に中指を用いる）が、中指が思うように動かない児童の中には、どみどを １・３・１（親指・中指・親指）ではなく、こ１・２・１（親指・人さし指・親指）と弾いたり、１・４・１（親指・薬指・親指）と弾く等の姿が見られた。机間巡回指導中に個別指導をしたが、定着するまでに時間を要した。今後、中指がより自由に動かせるような柔軟体操を取り入れてもよいかもしれない。

３問目：「指を動かしにくいと感じる音の動きを問う」ひよこのマークの設問の集計結果

この設問と最初のちょうちょのマークの設問とは少し似ているが、この３問目では「音と音の連結の細かい関係」や「音と音の動きや方向、距離」を言葉で示し、その中から選択してもらった。アンケート実施前から一斉練習を聴いていて「れどれみどみど●」の部分で混乱が見られていた。しかしながら、アンケート結果では、「どこもうごかしにくくない」という回答が予想よりも多かった。実際のアンケート結果は、「れからどへの移動」に５名、「れからみへの移動」に２名、「みからどに飛ぶ所」に６名、「どからみに飛ぶ所」に２名、「れどれのように行ったり来たりする所」に３名、「どみどのように行ったり来たりする所」に４名、「れみどのように変わった動きの所」に 10 名、そして、「どこもうごかしにくくない」と答えたのが 14 名いた。児童にとっては、答えを出すまでに指を動かして確かめる時間が必要だったようで答えにくい設問だったようであるし、自分にとってどの音型が弾きにくいのかについて、しっかりと把握できていなかった可能性も考えられる。

４問目：「演奏時の大変なことについて問う」かたつむりのマークの設問の集計結果

この設問には「息」という文言を組み込んだ。その理由は、演奏の際、吹き口のホースの扱いに困っている児童が見られたことや、息継ぎの際に肩で息をして力いっぱい吹く姿が見られたからである。この設問の結果は、次の通りである。「みんなにあわせて演奏すること」に 11 名、「速いテンポで演奏すること」に 10 名、「自分の指が思ったように動かないこと」に５名、「息を吹いて音を出すこと」に７名、「その他」に２名、どこにも丸をつけなかった児童が３名いた。また、複数回答した児童が２名おり、一人の児童は２カ所に、もう一人は３カ所を囲うように大きな丸をつけていた。この結果からは、みんなと同じテンポで演奏しなくてはならない、という緊張感や、自分の指が思ったように動かない焦り、そして、指だけに集中していればよいという訳にはいかない鍵盤ハーモニカ特有の難しさを児童たちがそれぞれに感じていることが読み取れる。家庭の習い事でピアノ等の鍵盤楽器を習っている児童の区分の中にも「みんなと一緒に弾いたことがないので難しい」という内容の記述回答が見られたので、①②や②②の児童だけに限ったことではないだろう。しかしながら、この大変だと思う点についても、児童たちは練習の回数を重ねていくにつれ、特に問題で

はなくなっていったように感じた。その他、「息の吹き込みが大変だ」という児童の意見が割と多かった点について述べる。使用している教育芸術社「小学生のおんがく１」では、教育出版「おんがくのおくりもの１」ほど息やタンギングについてのコメントがあるわけではないのでやむを得ないと思われた。教育出版の教科書では、息の吹き込み方の他に、「とぅーとぅー」とおはなしするかんじで、他にも「おとをくびるときやとめるときは,したをつかっていきをとめよう」と具体的な息の入れ方についてのコメントが書かれており、初期段階からタンギングを意識させている。もともと筆者は、「児童が指を正しい位置に置き、弾きやすい手の形を作って音名と鍵盤の場所を一致させることに必死な初歩の段階では息やタンギングのことまで頭や体が追い付かない児童も多いのではないか」と感じていた。今回、初めて「タンギングと運指を同時に教えない方法」(内容を二分割して別の時期に指導する方法) を採用して指導を実施した。

5 問目：「鍵盤ハーモニカを演奏することについて問う」りんごのマークの設問の集計結果

学年全体、男女別の集計結果を提示したものと比べると分かりやすいが、この設問の結果は、「とてもたのしい、だいすき。」が 23 名、「まあまあすき。」が 10 名、「なんともおもわない、ふつう。」が 4 名、「つまらない。」が 3 名という結果となった。今回のアンケートで「つまらない」に回答したのは全部で 3 名であったので、この①②及び②②の区分の中に「つまらない」と感じている児童 3 名がいることが分かる。

ところで、今回のアンケートは無記名で実施したが、机間巡回して回答不備をチェックしている際に偶然、「つまらない」と回答している児童 A を見つけた。(同アンケートの最後に家庭での鍵盤楽器学習の実態を問う設問があるので、児童 A のアンケート用紙について続けて注視していた）ある日の授業で、児童 A が、右手の手の平を広げて正しい指で弾けるようになった。演奏時の手の形はきれいとは言い難かったが、みんなに遅れないように、必死で吹き、とうとう最後まで間違えずに演奏することができた。その授業後、児童 A は教室の後ろで見守っていた担任の先生の所へ駆け寄り、「せんせい、これ、できる？」と得意気な表情をして暗譜で吹いていた様子が見られた。

6 問目：「鍵盤ハーモニカについてこれから挑戦したいことを問う」ベルのマークの設問の集計結果

この設問では、今後の自分をイメージしてどのようなことをやってみたいか、挑戦してみたいかについて質問しており、一人につき複数回答をしてよいことにした。そのため、人数ではなく投票数で表している。結果は、「もっとむずかしいきょくにもちょうせんしてみたいな。」に 22 票、「ほかのいろいろながっきといっしょに、にぎやかにえんそうしてみたいな。」に 17 票、「けんばんハーモニカで、じぶんだけのきょくをつくってみたいな。」に 16 票、「ほかの子のえんそうをきいてみたいな。」に 9 票、そして、どの番号にも丸をつけなかった児童が 1 名いた。この①②及び②②の区分には 40 名の児童がいるため、65 票というのは児童数の 1.62 倍の数である。先述の【表 3】にある他の区分の結果と照らし合わせてみても、それほど低くなく、①②及び②②の児童も希望を持って取り組めていることが伺える。

7 問目：「これまでの鍵盤楽器の経験について（2 種類）を問う」人の顔のマークの設問の集計結果については、前述したので、ここでは取り上げないことにする。

5. 取り組みの提案

①算数ブロックのせについて

この活動は、ドレミファソを用いた楽曲『なかよし』を演奏中に実施した。右手の上に算数ブロックをのせて弾かせる理由は、1 つの鍵盤を 1 本の指だけ出したり引っ込めたりしながら弾かないようにし、手を開いたまま保つためである。手を広げたまま保つことは②②及び①②の児童たちには簡単なことではないように見受けられ、口頭で指を一本ずつ出して弾かないように指示してもなかなか定着しなかった。そこで算数ブロックをのせることにした。ところで、なぜ算数ブロックかというと、小学 1 年生の学習グッズで机の中に全員持ち合わせていたという点が第一の理由である。

第二の理由としては、その算数ブロックには、既に名前が書かれているため、万一落下しても持ち主に返しやすい点も挙げられる。そして第三の理由は、児童の手の大きさに合致すると判断したからである。そして、算数ブロックを「2つ以上」にしないことで、なるべく授業に集中できるようにした。実際に取り組んでみると、初回では、算数ブロックが何度も落下することで焦ってしまい、思うようにできない自分に苛立っている児童もいた。しかし、自分なりのコツをつかむために何度も練習を重ねた結果、手のぐらつきやばたつきを減らすことができ、一本ずつ指を出し入れしながら弾くのではなく、五本の指を出して手を開いたまま弾ける児童が増えた。その成果もあり、技術面で向上が見られた。クラスには家庭の習い事でピアノ等鍵盤楽器を習っている①①や②①がいるので、算数ブロックをのせる練習のチャレンジでも段階を設けた。指を正しく置けて弾けるようになった人から算数ブロックを１つだけ右手にのせる「チャレンジ・コース」に移ってもらうよう指示を出し、①①や②①もやる気を保てるように工夫された点も良かったと感じた。

②ペア学習活動

今回のペア学習活動では、相手ができた点や改善点を具体的に伝えるように沖田から指示があったため、児童が迷わず活動することができ、大変効果的であった。特に、聴く側の児童が弾く側の児童の「改善したらよいと思うポイント」について言及できる程度まで集中してよく聴きあうことができた点が良かったと感じた。漠然とした印象や感想を伝えてもお互いに上達につながりにくいので、できる限り具体的に言語化してお互いに伝えあえるようにしたく、そのための適切な指示が必要だと感じた。そして、教師への意思表示については、児童が教師にジェスチャーで示したため、児童の出来具合の確認を把握することができた。児童同士、教師と児童の間で交流が持てる有意義な活動であった。

③身体的な要素からのアプローチについて

演奏中の姿勢や脚の位置やイスの位置を調整したり、鍵盤ハーモニカの位置を修正したりする点について述べる。今回、演奏中の児童たちを観察した際、体が固まっている児童が多く見られた。そこで、一度立ってから座り直し、きちんと座ってから手の形を整えて弾くように指示をした。更に、鍵盤ハーモニカの下から１つ目のドの位置が自分の右手の親指に合う位置に鍵盤ハーモニカを移動する提案をした。これらのことで、弾き易さを感じると言った児童がいたので、適切な声掛けであったと考えられる。また、ある時、教科書を忘れた児童がおり、沖田が教科書の楽曲を板書する場面があった。この時、児童たちの目線が自然と上がり、そのおかげで姿勢がよくなったことがあった。この一件から、教科書を凝視することも姿勢の悪さを招く一因であるということが分かった。姿勢を正すことで腕の無駄な力が抜け、手をコントロールしやすくなるため、姿勢一つで良い変化が得られるのではないかと期待できる。姿勢を注意する時期としては、数時間の練習を経た状態が望ましいと考える。その理由は、ほぼ楽曲の音名が頭で覚えられていたり、口ずさめる状態でないと自信を持って取り組めないからである。

6. 創作活動の実践について

創作への意欲・関心があることから、鍵盤ハーモニカを用いた創作活動を次のように実施した。今回実施したアンケートでも、全体 143 票中の約４分の１の児童が「じぶんだけのきょくをつくってみたい」という項目に投票していた。（【表３】参照）創作活動の実践について、扱い時数は２時間で、手順は下記の通りである。

①これまでに習ったリズムの復習、及び、創作活動で使えるリズムの確認をする。
②リズム譜とどれみふぁそが書かれたワークシートを配布する。（指導書教材用資料 p.181、182、183 を参照）
③リズム譜に、「どれみふぁそ」の音を当てはめながらそれをシートに記入して演奏してみる。
④いくつか考えついた場合は、１つだけ選択し、赤鉛筆で囲む。※ここで１時間目の区切りとして一度提出。
⑤他の児童とペアになり、友達と連結させて演奏してみる。その際、「どちらを先に演奏すると、より良く聴こ

えるか」にも着目して演奏し、繰り返し演奏して聴きあい、判断して場合によっては入れ替えてみる。
⑥クラスで発表を行い、聴いた感想を述べ合う。※時間の都合上、数組だけの発表となった。

今回、板書で提示したリズムの例にとらわれず、「長い音」や「休符」も使えるのではないかと考えを巡らせる児童が沖田に質問する場面が見られた。このような流動的で対話的な活動は学習を深める非常に良い例だと感じたが、このような姿に至るためには、1年生の前半から取り扱ってきている「拍・リズム」をしっかりと身につけさせておかなければならないことを再確認させられた。発表の際、「長い音」について質問していた児童が含まれているペアでの演奏は、「ド ー ー ● |レミ レミ ド ● || であった。この演奏に対し、他の児童が「ドをずっとのばしていたから、不思議にきこえた」と感想を述べた。このように自分では考えつかないことを他の仲間が気づかせてくれることで、クラスに新しい発見が生まれたのではないかと思われる。更に、この授業の終わりの「まとめ」では、「友達と旋律をつなぐことで、曲になること」を児童が発見し、「もっと長いものも作れそう」という前向きな感想を児童自身から引き出すことができた。今回の鍵盤ハーモニカの単元では、ブロックのせや創作活動を実施したことで、どの段階の児童に対しても達成感を持たせることができたと見受けられた。今回の一連の授業により、ほとんどの児童が指の位置、音名と鍵盤の一致、階名唱、まねっこ奏、リズムや拍の定着等を身につけることができたので、次学年へのスモールステップとなったのではないかと感じた。後日、鍵盤ハーモニカの単元の最後に、技能のチェックをするために、改めて授業時間を作り、技能評価の時間を設け、定着度を観察した。評価の観点は、『どれみであいさつ』、『なかよし』の2曲の演奏を通し、①ドレミファソの位置が分かっているか、②正しい指で弾けているかであった。それらができていれば、「B」とした。全員が「B」以上であれば、授業が成功したと言えよう。

以上のことから、楽器の演奏技術面の上達だけでなく、仲間との学び合いや交流を通じて自分自身の学びを深めたり、他者の考えや思いを知り、それらを受け入れたりしながら活動することで、対話的な学びが実現することが分かった。引き続き、鍵盤ハーモニカ、音楽科の授業に対して苦手意識を持たせないような創意工夫をこらした授業をつくっていきたいと考えている。紙面の都合上、第2回目の『なかよし』に関するアンケート用紙及びアンケート結果、児童が書いた振り返りシートについては掲載できないため、それらについては、次回、述べることにする。

7．参考文献、参考資料等

奥田順也『小学校低学年を対象とする鍵盤ハーモニカの指導の今日的課題に関する一考察』（2017年）玉川大学芸術学部研究紀要（8）、pp.45-58
中嶋恵美子・小野寺敦子『知っておきたい幼児の特性』（2016年）音楽之友社
平野次郎『音楽づくりの言葉がけ』（2016年）音楽之友社
平野次郎編著　白石範孝監修『「資質・能力」を育成する音楽科授業モデル』（2017年）学事出版株式会社
向山洋一『「音楽」の授業の新法則』（2015年）株式会社 学芸みらい社
山本文茂『音楽はなぜ学校に必要か』（2018年）音楽之友社
山本美紀・筒井はる香『初等教育における鍵盤ハーモニカ学習の役割』（2016年）奈良学園大学紀要第5巻、pp.163-172
『おんがくのおくりもの1』（2021年）教育出版株式会社
『小学生のおんがく1』（2020年）教育芸術社
『小学生のおんがく1』教師用指導書 実践編（2020年）教育芸術社
『小学生のおんがく1』教師用指導書 研究編（2020年）教育芸術社
文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』（2018年）株式会社東洋館出版社

1年生　おんがく　けんばんハーモニカ

みんなのこまっていること、ちょっとむずかしいな･･･とおもっていることなどを おしえてください。

:つぎのうたを ひくとき、あなたが むずかしいとおもうのは どこですか？
1かしょ まるで かこんでください。
※●は おやすみ、うん、のところです。｜（せん）をまたいで まるでかこっても よいです。
※まるは どのくらいの大きさになっても よいです。

み　　み　　み　　み
れ　　れ　　れ　　れ
ど　　●｜　　ど　●｜　　ど　　｜ど　　ど　●||

:上のうたをひくときにつかうゆびの、右手の おやゆび、人さしゆび、中ゆび、この3本のゆびについて、あなたが 1ばんうごかしにくい とかんじるのはどのゆびですか？ 1つ まるで かこんでください。

①: おやゆび　　②: 人さしゆび　　③: 中ゆび

:「れどれみ|どみど●」には、ゆびが「となりに いどうするうごき」「1つとばして とぶうごき」「もとの音にもどる いったりきたりするうごき」などがでてきます。あなたが「ゆびをうごかしにくいな」とおもうのは、つぎのどれですか？あうもの１つ まるで かこんでください。

①: れ から ど へ いどうするところ(れ ↘ ど)

②: れ から み へ いどうするところ(れ ↗ み)

③: み から ど に とぶところ(み ↘↘ ど)

④: ど から み に とぶところ(ど ↗↗ み)

⑤: れ ど れ のように いったりきたりするところ(れ ↘ ど ↗ れ)

⑥: ど み ど のように いったりきたりするところ(ど ↗↗ み ↘↘ ど)

⑦: れ み ど のように かわったうごきのところ(れ ↗ み ↘↘ ど)

⑧: どこも うごかしにくくない。

つづきます ☞

：けんばんハーモニカで「どれみ●|みれど●|れどれみ|どみど●」 を えんそうするとき、あなたが「たいへんだな・・・」とおもうのは、つぎのどれですか？ 1つ まるで かこんでください。

①：みんなにあわせて えんそうすること

②：はやいテンポで えんそうすること

③：じぶんのゆびが おもったように うごかないこと

④：いきをふいて おとをだすこと

⑤：そのた（ りゆう：　　）

：あなたは けんばんハーモニカ をえんそうすることが、

①：とてもたのしい、だいすき。

②：まあまあ すき。

③：なんともおもわない、ふつう。

④：つまらない。

：これからさき けんばんハーモニカのじゅぎょうで あなたは、

①：もっとむずかしいきょくにも ちょうせんしてみたいな。

②：ほかのいろいろながっきといっしょに、にぎやかに えんそうしてみたいな。

③：けんばんハーモニカで、じぶんだけの きょくを つくってみたいな。

④：ほかの子のえんそうを きいてみたいな。

：あなたは ようちえんで けんばんハーモニカを ならいましたか？

① ならった　　② ならっていない

：あなたはがっこういがいでピアノやエレクトーンをならったことがありますか？

① ならったことがある（いまも ならっている）　②ならったことがない

ごきょうりょく ありがとうございました。　ぎふだいがく　なかだ くみこ